CASSIOPEIA NKANI

Vol. 48. October 2025

CASSIOPEIA－UHC達成に向けて、対象の5つの病院における、5つ星に輝く質の高い医療ケアサービスを目指して

JICA　ルサカ郡総合病院運営管理能力強化プロジェクト

ルサカにて開催された、カニャマ地区コレラ対策ワークショップの参加者（2025年10月17日）。

カニャマ一次レベル病院、カニャマ地区向けコレラ対策研修を実施

ルサカ郡の薬剤師、四半期会合のため州保健局に集う薬剤師

サテライト薬局の導入、一次レベル病院は患者に寄り添うケアを提供

チレンジェ一次レベル病院、看護・医学生にIPCオリエンテーションを実施

ルサカ州保健局、第2・3四半期の感染予防管理会議を開催

カニャマ一次レベル病院、カニャマ地区向けコレラ対策研修を実施

カニャマ一次レベル病院は、2025年10月14日から17日にかけて、4日間のコレラ対策研修を実施しました。対象となったのは、カニャマ地区に位置するカニャマ一次レベル病院および保健センターなどの関連施設で、コレラ対策を中心的に担うスタッフです。

研修は、カニャマ病院の感染予防管理（IPC）チームのIPC担当医兼公衆衛生専門官であるイルンガ・ムトゥワレ氏、カニャマ地区担当の環境保健技術者のアクソン・モニャマ氏、そして関連施設の各分野のファシリテーターの指導のもとで行われました。参加者は、検査室、薬剤部、環境衛生、看護、臨床、事務、公衆衛生など、コレラ対策に関わる多様な職種にわたりました。

研修の目的は、雨季の到来とともにコレラ発生のリスクが高まる中で、コレラ発生に備え、カニャマ地区内の全ての保健医療施設が、医薬品、資機材、インフラ、人員、対策の面で十分な準備を整えられるよう、基本的な知識を改めて確認・整理し直すことにありました。2023/2024年のコレラ流行では、ザンビア全体で約500人の命が失われましたが、その後の人事異動により、当時の状況を現場で経験したスタッフはカニャマ地区ではかなり少なくなっています。

ムトゥワレ医師のリードのもと、各保健医療施設からの参加者は、前回の流行で浮き彫りになった課題を踏まえながら、コミュニティへの介入を通じたコレラの予防策や、発生時の感染拡大を防ぐための対策を確認しました。ムトゥワレ氏は、「カニャマ地区の各保健医療施設が技術と知識、リソースを動員する準備を整えることで、コレラ患者が一次レベル病院に

カニャマ地区コレラ対策研修で発言する参加者

© JICA - The Project for Strengthening Management Capacity of the General Hospitals in Lusaka District

搬送される前の“第一防衛線”として機能することができる」と強調しました。

JICAカシオペアプロジェクトのチーフアドバイザーである村井真介氏は、「コレラ流行が起こりやすい季節を前に、ガイドラインの内容も踏まえて実施された今回の研修は、時宜を得た重要な取り組みである」と述べました。また、「コレラのアウトブレイクを待つのではなく、カニャマ地区の保健医療施設が主体的にサービス提供への備えを進めている」と評価し、参加者に対して、各々の強みを活かしながら、研修で特定されたアクションポイントを迅速に実行するよう呼びかけました。

さらに、この研修には、ルサカ州保健局の主任環境保健官であり、州保健局長代理として出席したキャセル・チボーラ氏も参加しました。チボーラ氏は、カニャマ地区全体を対象に研修を企画したカニャマ病院のチームを称賛し、「コレラ対策は複数部門の協働によって初めて実効性を持つ。すべての職種が重要な役割を担っている」と述べました。また、継続的な支援を行っているJICAカシオペアプロジェクトに対しても、謝意を表しました。

研修の中では、参加者から、各施設で保健情報チームを再活性化するなどの行動計画も提案されました。一方で、多くの施設に共通する課題として、大量の輸液やその他の備蓄品を保管するための十分なインフラがないこと、顆粒塩素や個人防護具（PPE）の不足といった問題も指摘されました。

研修の最後にムトゥワレ氏は、各施設が研修で議論した内容をできるだけ早く実践に移すよう要請しました。

イルンガ・ムトゥワレ氏（臨床ケア部長 兼 公衆衛生専門官代行）が、コレラ対策研修で挨拶する様子

© JICA - The Project for Strengthening Management Capacity of the General Hospitals in Lusaka District

ルサカ郡の薬剤師、四半期会合のため州保健局に集う

2025年10月28日、ルサカ州保健局にて、薬剤師会合が開催されました。会合には、ルサカ州保健局とルサカ郡保健局の薬剤師に加え、5つの一次レベル病院（チャワマ、チレンジェ、チパタ、カニャマ、マテロ）、チェルストン・ミニ病院、マンデブ地区、ルサカ・セントラル地区の薬剤師が参加しました。

この会合では、各施設のMTC（医薬品・治療委員会）の活動状況、サプライチェーンの最新情報、医薬品在庫の状況、薬剤の適正使用（Rational Use of Medicines）、薬剤師が参加したJICAの国別研修から生まれたアクションポイントの進捗、ベストプラクティスと現場での課題の共有など、多岐にわたるテーマについて議論が行われました。

ベストプラクティスとして、カニャマ一次レベル病院の多職種による週次クリニカルラウンドが紹介されました。各病棟を回りながら患者の治療計画や薬物療法について検討しています。部門責任者は、入院部門（IPD）にサテライト薬局が設置されたことで、ラウンドの調整がしやすくなったと説明しました。

チレンジェ一次レベル病院における処方充足率（PFR）のパイロット事業も学びます。これは、施設内で頻用される薬剤について、処方と実際のギャップを把握する取り組みです。

ルサカ郡保健局の薬剤師であるラバン氏とンコマ氏、州保健局の薬剤師であるチシャ氏およびムショシャ医師は、参加者に対し、JICAカシオペアプロジェクトを通じて得られた成果を土台にとしてさらに発展させていくとともに、施設内部の課題については、それぞれの現場で解決策を見いだすよう呼びかけました。

ムショシャ医師は、これまでのプロジェクトで蓄積されてきたデータを活用し、業務の中で直面している成果や課題を整理した抄録や学会発表用の論文としてまとめていくことを勧めました。

最後に、チーフアドバイザーが、薬剤師たちがプロジェクト指標を着実に達成している点を称賛し、これまでの成果をさらに高める工夫を続けていくよう励ましました。

発表に耳を傾けるムンビ・ムショウシャ氏（ルサカ州保健局薬剤師）

ハチゾー氏（マテロ病院薬剤師）とサクヤ氏（チパタ病院薬剤師）

© JICA - The Project for Strengthening Management Capacity of the General Hospitals in Lusaka District

サテライト薬局の導入、一次レベル病院は患者に寄り添うケアを提供

ルサカ郡の一次レベル病院では、サテライト薬局の導入が進められています。一番最初にサテライト薬局を開局したのはカニャマ一次レベル病院でした。今回、新たにチャワマ一次レベル病院でもサテライト薬局が開局しました。

サテライト薬局の目的は、入院患者の近くで医薬品を提供し、より迅速で質の高いケアを実現することです。これまで、入院患者に使用する薬剤、一括で入院部門（IPD）に送られており、その使用量を正確に把握・追跡することが難しい状況でした。

チャワマ病院の薬剤部門責任者であるシピウェ・マコワネ氏によると、サテライト薬局により、入院患者への投薬管理が改善されたといいます。以前は、入院病棟にまとめて送られた薬剤の使用状況は詳細に把握できませんでしたが、「現在は、患者一人ひとりに渡す薬剤はカルテを参照して事前にパッキングするため、正確な投薬量が把握でき、責任の所在も明確になり、管理しやすくなった」と説明しました。また、薬剤師が治療計画に助言したり、薬剤有害事象の監視（ファーマコビジランス）を行ったり、投薬期間や治療反応を継続的にモニタリングできるようになった点も重要な変化として挙げました。

サテライト薬局を担当する薬剤師のチムカ・チャンダ氏も、「病棟の近くに薬局があることで、薬剤師が病棟ラウンドに参加し、薬学的な視点から患者の治療を見守ることができるようになった」と話しています。一方で、「現在は平日の午前8時から午後4時までの運営で、週末は閉鎖されているため、サービス提供の時間は限られている。サテライト薬局をより長時間運営するには、さらなる人員が必要」と課題も指摘しました。マコワネ氏もこの意見に同意し、JICAの「訪日課題別研修（KCCP）」に参加した経験を踏まえ、「日本では薬剤師が薬剤の物流よりも患者ケアに重点を置いていた」と述べました。

入院部門（IPD）の看護責任者であるマルンゴ・ンガンドゥ氏は、「サテライト薬局が稼働して以来、入院病棟と薬局の連携が向上した」と話しています。「入院病棟が薬剤を入手する際に

入院病棟（IPD）責任者のンガンドゥ氏、薬局部門長（HOD）のマキワネ氏、サテライト薬局の薬剤師チャンダ氏

マテロ一次レベル病院の薬剤師、カラバ氏がサテライトオフィスにて

© JICA - The Project for Strengthening Management Capacity of the General Hospitals in Lusaka District

も、以前のように一括で注文するのではなく、患者のカルテに基づき、その病棟で必要とされる薬剤が注文されるようになった。これにより、より患者のニーズに即した薬剤供給が可能になった」と述べました。一方で、マコワネ氏もサテライト薬局の運営時間に限りがあることを指摘しました。局を利用しており、外来薬局（OPD）の混雑が緩和されている」とのことです。

マテロ一次レベル病院では、国民健康保険スキーム（NHIMA）の対象となる病棟にサテライト薬局が設置されています。薬剤師のチシャ・カラバ氏によると、「現在は病棟内に十分な保管スペースがないため、サテライト薬局をフル稼働させることができていない。しかし、NHIMA患者に対応する際に他の部門もこのサテライト薬局を利用しており、その結果、外来薬局（OPD）の混雑が緩和されている」とのことです。

看護責任者のペイシェンス・カペサ氏は、「サテライト薬局は外来薬局と同様の品目を取り扱っており、円滑に機能している」と評価しつつも、「スペースの制約により、大型の物品や医薬品を十分に保管できず、患者に提供できるサービスが限られている」と課題を述べました。また、サテライト薬局の営業時間についての課題も述べました。

チャワマ病院とマテロ病院は、サテライト薬局の導入を前向きに受け止めており、今後この仕組みが他の施設にも広がり、患者にとってより身近なケアとなることが期待されています

エデン大学の薬学部学生インターンが、チャワマのサテライト薬局で業務に従事している様子

© JICA - The Project for Strengthening Management Capacity of the General Hospitals in Lusaka District

チレンジェ一次レベル病院、看護・医学生にIPCオリエンテーションを実施

一次レベル病院では、実習で訪れる多くの学生を受け入れています。チレンジェ一次レベル病院では、2025年10月15日、ルサカ市内4大学から実習に訪れた90名以上の看護・医学生を対象に、感染予防管理（IPC）の標準実践手順に関するオリエンテーションを実施しました。チレンジェ病院では、新たに受け入れるすべての実習生に、このオリエンテーションの受講を義務づけています。

オリエンテーションを担当したのは、看護部長のマチルダ・ムベウェ氏、環境保健部門のエリアス・ダカ氏（地区環境保健技術者）、ヴァーノン・ムワバ氏（環境保健技術者）、クライド・ウシバントゥ氏（環境保健技術者兼IPC担当責任者）です。

学生たちの実習期間は6週間で、その間、チレンジェ病院の各部署に配属されます。研修では、機器の洗浄・除染、廃棄物管理、Personal Hygiene（個人衛生）、手指衛生、個人防護具（PPE）の正しい使用方法に関する標準作業手順書（SOPs）について説明が行われました。あわせて、実際に手洗いやPPEの着脱も体験する実技も取り入れられました。

ムベウェ看護部長は学生たちに対し、「配属先の部署で、上司が示す良い手本を見習い、分からないことがあれば必ず質問してほしい」と呼びかけました。環境保健部門のファシリテーターたちは、廃棄物管理のプロトコルを厳守すること、そして「手指衛生の5つのタイミング」を常に意識して実践することの重要性を強調しました。

また、オリエンテーションでは「廃棄物管理マッチングゲーム」も取り入れられました。これは、日本海外協力ボランティア（JOCV）としてチョングウェ郡保健局で活動している藤富絵里香氏が開発した学習支援ツールです。参加者は、「一般廃棄物」「感染性廃棄物」「高度感染性廃棄物」のカードを、それぞれ適切な廃棄方法に分類することで、廃棄物の区分や処理方法に関する知識と判断力を養いました。

環境保健技術者でIPCフォーカルパーソンのクライド・ウシバントゥ氏がIPC研修を開始する様子

ゾーン環境保健技術者、エリアス・ダカ氏が、学生に廃棄物管理のマッチゲーム（写真中央）を説明している様子

© JICA - The Project for Strengthening Management Capacity of the General Hospitals in Lusaka District

ルサカ州保健局、第2・3四半期の感染予防管理会議を開催

2025年10月23日、ルサカ州保健局において、第2・3四半期の感染予防管理（IPC）会議が開催されました。会議には、ルサカ郡内の5つの一次レベル病院、大学教育病院、国立心臓病院のIPCチーム、モニタリング・評価担当官、保健情報担当官が出席しました。

まず、ザンビア保健省が2025年8月に全国展開した手術部位感染（SSI）サーベイランスの他施設への展開が議論されました。そして、多くの施設から「他のイベントと重なり、IPC会議の開催が難しい」が、様々な会議を活用しIPCの情報を報告し、話題提供する工夫もありました。

注目されたのは、チパタ病院の、IPC会議とSSI会議を統合し、病院カレンダーに定例行事として組み込んだ取り組みでした。さらに、2026年度予算で、看護活動の一部としてIPCの独立した予算を編成しました。これらは、他の4病院にも共通する課題への対応です。

また、検体採取が不十分なため、SSI症例が見逃されている可能性が指摘されました。術中・術後のSSIチェックリストの記載不十分、IPC会議の継続開催の困難、微生物検査室が未整備といった課題が挙がりました。

これらを受け、アクションポイントに合意しました。検査室チームがSSI検査依頼フォームを作成し導入する、大学教育病院が、職員にSSI研修を実施する、各施設がSSIチェックリストを見直し、フィードバックするなどがありました。

最後に、ルサカ州保健局主任環境保健官のキャセル・チボーラ氏が、参加者に謝意を述べるとともに、合意の確実な実施しと報告を呼びかけました。

第2四半期の手術部位感染（SSI）および感染予防・管理（IPC）アップデートについて発表するムトゥワレ氏（カニャマ病院）

© JICA - The Project for Strengthening Management Capacity of the General Hospitals in Lusaka District

PHOTO FOCUS

サテライト薬局の薬剤師チャンダ氏（薬剤師）が入院病棟の看護師とともに、患者ファイルに基づいて薬をオーダーしている（チャワマ病院）。

チーフアドバイザーがカニャマ地区コレラ対策研修で挨拶する様子。

チレンジェ病院の看護部長であるマチルダ・ンベウェ氏が、看護学生・医学生向けにIPCオリエンテーションをする様子

チパタ病院のIPC看護師、チプル・ハバニャマ氏が、IPC四半期会合で挨拶する様子

JICA本部の小川瑶葉氏が、カニャマ地区コレラ対策研修で挨拶する様子

環境保健技術者のプリンス・ブワリャ氏（右）と学生インターンのジョイ・ニャンガ氏（左）が、チャワマ病院でIPCラウンドを行っている様子（2025年10月22日）。

編集・デザイン：コンベ カパタモヨ
編集：萩原 悠
編集長：村井 真介

連絡先
村井 真介 ルサカ郡病院運営管理能力強化プロジェクト チーフアドバイザー

住所：Plot No.11743A, Brenwood Lane, Longacres. P.o. Box 30027, Lusaka, 10101, ZAMBIA
Cell: +260 765 192 865 (official)

村井チーフアドバイザー（左）とミシシ・ミニ病院の薬剤技師レイチェル・ブワリャ氏（中央）およびルサカ郡保健局（LDHO）の薬剤師アグネス・ンコマ氏（右）、ルサカ州薬剤師四半期会合（2025年10月28日開催）にて。

© JICA - The Project for Strengthening Management Capacity of the General Hospitals in Lusaka District